

PVC 第 4 回講演 檜原洋平氏(2021 年 2 月 24 日)

「大学教育×価値 ～教養と専門科目が象徴する“大学”とは～」

ゴールデンセブン

今回のゲストは人事のトップバリュークリエイター、檜原洋平さん。

檜原さんは「日本を、世界で最も若者が育つ社会にすること」をモットーに組織人事コンサルタントとして「尖った」若者の採用、育成に取り組んでいる。

そんな彼は大学の 4 年間と、就職入社後の 3 年間を合わせた計 7 年を「ゴールデンセブン」と名付け、人材育成において非常に重要な黄金の 7 年間として位置付けている。

どのような人材になりたいのかという「目的」を基に「ゴールデンセブン」を最適化することが尖った人材の育成につながるのだ。

では「ゴールデンセブン」にまさに面している私たち大学生はこの期間をどのように捉え、自身の可能性を広げていけばいいのだろうか。

今回は大学生にとって身近な「授業」に注目し、大学授業の価値、そして授業に対する私たちの姿勢について実際に大学でもプロジェクトを行っていらっしゃる檜原さんからお話を伺った。



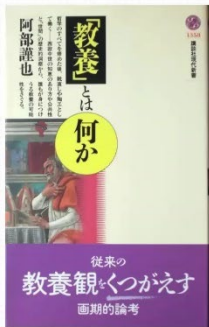
今回お話下さった桒原洋平さん

教養の始まり

桒原さんは本講演にあたり学生時代に出会った本を再び読み返して下さった。

桒原さんの母校、一橋大学の学長を務めた阿部謹也氏著の“「教養」とは何か”である。

阿部氏が展開する「教養」の始まり



12世紀になってはじめて「いかに生きるか」という問いが実質的な意味をもつことになった。この頃に都市が成立し、そこで新たな職業選択の可能性が開かれていたからである。

この頃多少知的関心がある人はこの問いをローマ末期の作家たちに問いかけていた。当時の俗語としてのフランス語やドイツ語ではこのような問いに答えることができなかったからである。

その答えはローマ末期の作家たちによって用意されていたから、この頃の人々はまず「ラテン語」で答えを考えたのである。

教養の始まりは「いかに生きるべきか」という問いを立てたことにあった。そのような問いを立て得たのは都市の数少ない人々なのであった。



ここに大学で教養を学ぶ意味を見つけるヒントが隠れていた。

阿部氏によると教養が始まったのは、都市が成立し、

人々が仕事や職業を自由に選択できる可能性が開かれた 12 世紀。

都市の数少ない人々は働く背景が変化しつつあるところから自身が

「いかに生きるべきか」問いを立てた。

自身が「いかに生きるべきか」という問い。これが教養の起点である。

加えて阿部氏は

「教養のある」状態を「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるのかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」と定義した。

「教養の定義はたくさんありますが、これが一番すんなりと納得できたんです。」と榎原さんは言う。

「いかに生きるか、という問いが意味を持つ方々が今日の参加者ではないかなと。

つまり、いかに生きるかとか決まっている、そんなこと問う気もないという人たちではないかなと想定しています。」

この言葉を聞いて筆者は「いかに生きるか」という問いを立て一つの答えが出たら終わり、ではなく導き出した答えを疑い本当にそうなのか、もっと自分が出来ることはあるのではないかと自問自答を繰り返す、

まるでさなぎが成虫になるべく殻の中で変態する状態のようだなと感じた。

考え続ける重要性を改めて体感した瞬間だった。

力なき正義は無力

「僕が社会人になって実感したことで、いざ社会に出てみると思いだけでは何ともなんねえなということに気づいた。」

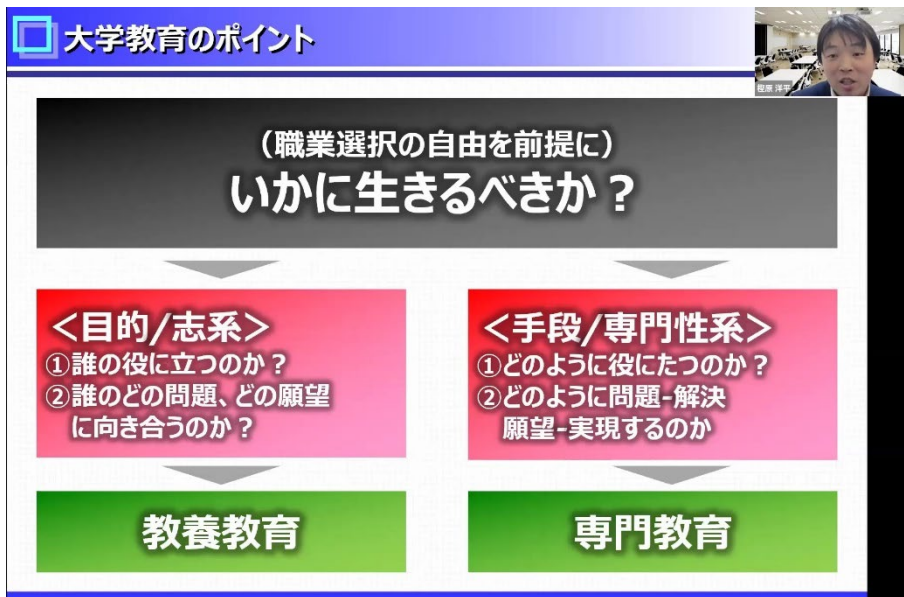
学生時代、積極的に活動を行っていた榎原さんは、多くの社会人に支援を受けてきたという。しかし、自身が社会人になってこのことを痛感した。

「誰かの役に立つためには力が必要」

榎原さんが社会人になって初めて得た学びであった。

教養科目、専門科目のポイント

ここまでの話を踏まえ、榎原さんが思う教養科目、専門科目それぞれを学び意味を伝えてくださった。



「いかに生きるか」の問いを考えたときに2つの傾向があると榎原さんは考える。

一つ目は「誰の役に立つのか、だれのどの問題・願望に向き合うのか」といった生きる目的や志を考える教養教育系統の話

もう一つが決めた目的に対して「どのように役に立つのか、どのように問題解決・願望の実現をするのか」といった目的達成の手段や専門性に着目した専門教育系統の話である。

「大学といたら本来はこの2つの系統を両方、バランスよく身に付けていくということが必要」

榎原さんはこの2つの軸が両軸であり、2つの観点からのインプットは大学だけでなく一生続き、リーダーを形成するうえで重要と考える。

実はカントの議論にも榎原さんが示したものと似た考えがあるという。



「上級学部」

- ① 神学部：各人の永遠の幸せを
- ② 法学部：社会の各成員の市民的な幸せ
- ③ 医学部：肉体的な幸せ
- 政府は上級学部の教説を認可し統御することで、国家権力を行使するのである

「下級学部」

- ④ 哲学部：国家権力の後盾がないが、しかし、すべての教説を判定する理性の自由を保証
- 国家の利害関心からは独立しており、その教説は国民の理性のみに委ねられる

カントは学部を「上級学部」と「下級学部」の2つに分けていた。

「上級学部」は人々の生活に直結し、国家の統制がある程度必要な学部、

「下級学部」は哲学をはじめとした国家から独立し、すべての教説を判定する理性の自由が保証されている学部である。

カントはこの両方が大事だと主張する。

「上級学部」で確かな知識を得ながらも「下級学部」で自身の心理を審級する自分を立ち上げることが非常に重要なのだ。

また榎原さんは陰陽説の図を用いながらこのように語った。

中国古代、近年ではビジョナリーカンパニーでも使われている構図で



「教養教育と専門教育、簡単に言えば下級と上級を両方回していくというプロセスがこれからとても大事です。」

「これを自分の中で回し続けるサイクルを大学でしっかり身に着けるかどうか非常に重要です。」

人生をどう生きるかという問いに一生向き合い続けるためには教養科目と専門科目の両方をバランスよく自分で回していく力を大学生のうちに得ておくことは必要不可欠である。

今の時代に教養は必要なのか？

さて教養科目、専門科目が持つ意味や重要性を実感したところで議論は大学生なら一度は思ったことがある、この疑問へと移った。

「正直、時代のフェーズによっては相対的に必要なかった時もあるかもしれない。」

「おそらく皆さんの親御さんの時代は組織があってそこに自分が染まっていく、そうすれば幸せだったし、何不自由なく生活できた。」

しかし、時代が移るにつれこの構造は変わっていく。

梶原さんは以下の4つの「働く」の変化を示した。



- ①人生 100年時代と終身雇用の現実的な瓦解
- ②コロナの進展による、ニューノーマルなワークスタイル
- ③副業・兼業の社会的許容
- ④メンバーシップ型から、ジョブ型雇用の変容

1 つ目は大企業でも 30 年後何をやっているか、企業が残っているかわからない状態、つまり会社で社員の終身雇用を保証するのは極めて難しくなっていることだ。

「自分でいろんな会社を回っていく力をつけないといけないんです。」

2 つ目は新型コロナウイルスの影響によってワークスタイルが多様化したことだ。

「家で働く時間が増えることで上司の顔色を伺わなくてよくなる、みんなで頑張ろう、というメンバーシップ型も難しくなっている。」

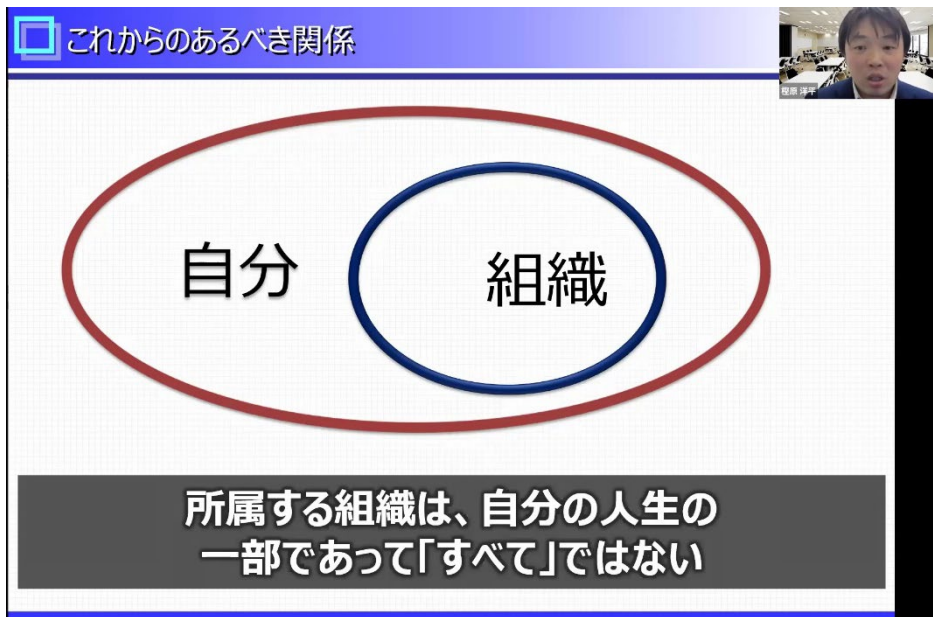
3 つ目は副業や兼業が社会的に認められるようになってきたこと、そして最後が雇用の形がメンバーシップ型からジョブ型へと変容していることだ。

「簡単に言うと、これまでのキャリアは会社が決めていたんです。そしてそのミッションに準じていたら出世もしたし、評価もされた。」

しかし、今後は企業や自身が何年後にどうなっているかわからない時代。

「ミッションに忠実に適応する能力は一方で大事だが、じゃあそれで次を描けるのか。」

これらを踏まえて榎原さんがこれからあるべき組織と個人の関係はこうだ。



「所属する組織は自分の一部であって“すべて”ではない。つまりどこの会社に入っているかも自分の個性となる。」

「もう少し言うと、キャリアの決定権が“より”組織から個人へとシフトするんですよ。これはもう避けて通れない流れです。」

「だから、皆さんの生きている時代は、親御さんが生きてきた環境よりも“より”いかに生きべきかという問いを立てなきゃいけない社会環境にあるんですよ。」

「したがっていかに生きべきかを主体的に問い、学び続ける人が活躍するし、生きやすいし、生かされる時代なんですよ。」

檜原さんは強調した。

そして私たちに語り掛けるように言った。

「まず、この現用認識を正しく持ったうえで大学教育の価値ってものを捉えなおす必要がある。」

私たちは授業の価値に対してあまりにも無関心だったかもしれない。

「いかに生きべきか」考える時間を常に問い続けてそれに基づいた教養科目でさらに自分の目的や志を掘り下げ、専門科目でそれらを実現する手段を得て具現化していく。

この 2 つの軸で考えると、皆さんが選択する授業も、授業を選ぶタイミングも変わってくるだろう。

筆者は 2 年生の段階ですでに教養科目を受け終えてしまった。つまり、私の目的や志を探っていくフェーズのバトンはまだ私自身に移されたのだ。

学年が上がるにつれ専門科目に重点が置かれやすいが、いかに教養の重要性を理解し学びを継続できるかが課題である。

日本の大学の現状～学びを取り戻せ～

最後に梶原さんは多くの大学の現状を示した。

まずは多くの場合学びの主権が「大学」ある。そしてこれは決して大学だけではない。梶原さんは小学校 3 年生の息子さんと次のようなやり取りがあったという。

「息子にこういうのを学んだらいいんじゃないか、といったらそれはまだ学校で習わないとかいうんですよ。」

「学校で学ぶとはどういうことだ、学ぶのは自分じゃないのか、なんで学校が教えてくれるまで待つんだ、おかしくないか。」

ひと悶着あったがその場は梶原さんの奥様が場を収めたそうだ（笑）。

「しかし、学びの主権は誰にあるかということです。つまり、大学は教授から授業を受ける場なのかという問いかけです。」

また、学びのリソースは講義になっていることだ。

「よく大学の授業に期待して行ったのに実際授業は面白くなかった、だから大学に失望したみたいな話を聞きます。それは本当か？」

3 つ目は良い大学に行けば良い会社に行くことが出来生活が安定するという考えがあること、最後に資格重視で教養は役に立たないと一蹴する人がまだまだいることだ。

「たしかに日本経済に余裕があった時代は勉強しなくてよかったかもしれない。でも時代環境が違う。今は明らかに違う。その分大変な時代。」

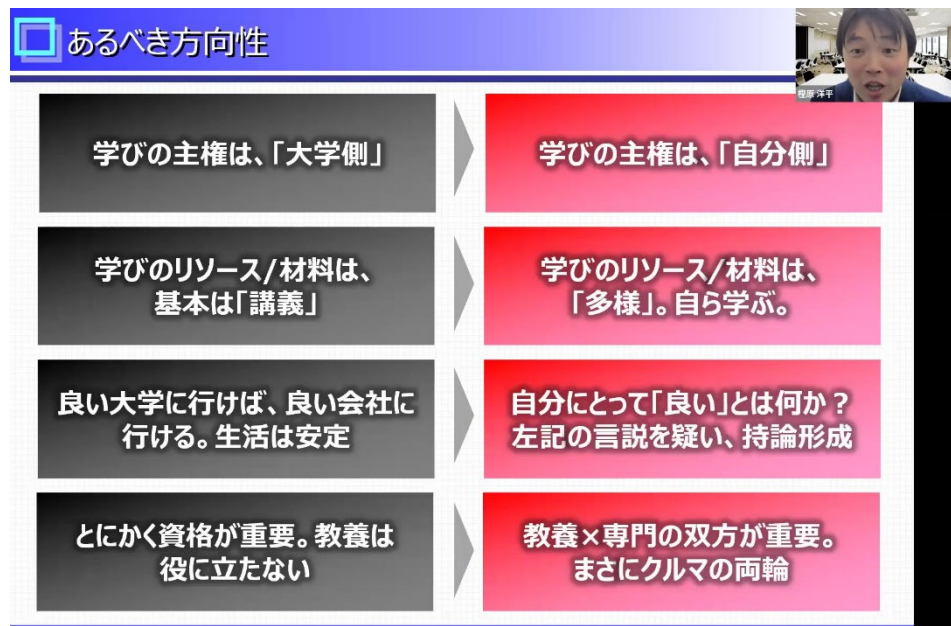
ではどうあるべきか、ここからが榎原さんのメッセージである。

「まず学びは自分のものだよね。日本は特に大学生と社会人を区別します。大学時代は学びが中心で社会に入ったら働くだから働くと学びのプライオリティーが下がるんです。いやそんなことないよね、いつまでたっても学ぼうぜ。だから学ぶってものは自分のものという認識を“取り戻す”が必要です。」

「あと学びのリソースはいろいろ。本を読んでもいいし、教授に話を聞いてもらってもいい。授業に出るだけが大学のリソースですか？授業はいちツールなんです。」

「そして、良い大学や良い会社って何と自分にとっての“良い”の定義を問わなければならない。」

「最後に教養と専門は双方重要で車の両輪みたいなものだからこの両方を高めていくサイクルがとても大事であるんです。」



榎原さんは私たちに強く、熱く語りかけた。

「僕はぜひ皆さんに学びを取り戻してほしいし、自分で学ぶんです。それが高校との一番の違い。自分の学びをデザインするのが大学。だから学びの主体は自分なんだということを自

覚しないと学びの決定権を他社に委ねてしまう。」

「本来学ぶとは楽しいことだし、何かが分かるってめちゃくちゃ快樂だと僕は思うのですが、それが阻害されていることがいま一番不幸じゃないのかな。」

これを聞いた筆者はハッとした。自分の人生を決めるのは自分だ。だったらなぜ学びを大学の講義に頼り切ってしまっているのか。

さらに「いかに生きるべきか」問い続ける限り社会にでても学びは一生続く。

だから大学生の今、学びは楽しいということを思い出すことが学びを継続するうえで非常に重要だ。

このまま学びに楽しい印象を持たないまま進んでは、おのずと生活から学びは離れていくだろう。

思えば、小さい頃は初めて見る生きものの名前を知ったり、新しい言葉を覚えたり、学ぶことは自分の人生を豊かにする楽しいものであった。それがいつから学ばなくてはならない義務のようなものになってしまったのか。

社会人に比べ時間がある今、学ぶ喜びを取り戻せる大きなチャンスかもしれない。

少しでも自分の好奇心が赴くものがあれば学びの一步を踏み出そう、自分のなかでの“学び”へのイメージをとことん変えてやろう。

ルールメイキング

檜原さんの熱く、深いお話の後に参加者からの質問タイムが設けられた。

そこで話題になったのが「ルールメイキング」の話である。

「いま世界で勝負している方々の日本の課題で言うと、やっぱりルールメイキングに関わらないことです。ルールメイキングに携われるようなタフな層をどう作っていくか。」

日本の大学がグローバルな環境の中で戦っていくためにどういったことを示唆していくべきか、という問いに対する檜原さんの答えである。

ここへ更なる質問が飛んだ。

「日本人がルールメイキングをする必要性とは何ですか。」

神戸大学 1 年生からの実に鋭い質問だ。

「日本は決められたルールの下で高品質で高レベルなものをキャッチアップする製造業を中心とした商売が得意なので、1990 年代までは世界で勝つことが出来ていました。」

もちろんこの従来のキャッチアップが今でも必要であることを踏まえたうえで榎原さんは続ける。

「世界的にみて、日本は安く高品質なものを売るだけではもう勝負できない国じゃないですか、ということは高品質で新しいものをどんどん生み出していかないといけないという局面にある。だから新しいものを考えて問うような取り組みをしていかないと価値を発揮できないんです。」

「答えのあるゲームにキャッチアップする受験のようなゲーム構造と社会のゲーム構造は今アンマッチしているんですよね。だから、戦略的にアンラーニングして新しいものに適応していかないと。」

「日本人は今までの受験的世界観のゲームがみんな社会でも続くと思っている。だから、そのゲームが通用する職種に人気が集まる。だけど世界はシフトして行っている。そのシフトに対応しなければ新しいゲームに対応できる人がいないぞ??となってしまう。」

すると参加者から

「ではゆくゆくは教育制度も変革が必要だと思うのですが。」と追い質問が。

「でも、教育制度はなかなか変わらないじゃないですか。だから、気づいた人がとにかく実験してみないと、制度が変わるのを待っていたらそれこそジ・エンドだし、そもそも制度を変える人材を作っていかなないと、制度は変わらない。」

日本は枠組みさえあればその中で高品質な製品やサービス、つまり高レベルな「課題の解決策」を提供することが出来る。しかし、日本の製品、サービスは「解決策」があふれかえっている既存の課題のフィールドで商品の安さを武器にした他国に苦戦を強いられている。

だから、日本の課題解決力を活用するには新たな問題を発見する人材、そしてそれを解決す

るための型となるルールを作る人材が必要となるのだ。

「ルールをどう作っていくかということ非常に重要なんです。例えば炭素や水素などのエネルギー問題もどういう枠組みが正しいのかっていう所を抑えている所が最初にその課題に対してキャッチアップできる。」

「グランドデザインやルールメイキングといった所は歴史的にみると比較的苦手な側面があるのでそこを磨く意味でも大学教育では”メタ”でものをみたり、ものを組み合わせたりする思考運動がなければ枠組みを定めるような場で発言が出来ない。結果報われない人が多くなってしまう。」

ここへ V.School 長である國部教授も

「政治にもこの話が言える。日本人は政治を忌避するようになっているけれど、それが逆に政治家の利権を守ってしまっている。だからリスクはあるが政治にちょっとはコミットすることを頭に入れなくては。そうでないと政治にコミットする人が減り特定の方向だけに向きやすくなってしまう。」

「いま日本はまさにその状態だから世界の競争にもどんどん負けていって”世界のルールメイキング”で負けてしまう。日本のルールメイキングばかりやっているから。」と付け加えた。

筆者はここに外国語の習得や多文化理解の必要性を強く感じた。

新たな課題を見つけたり、その現状に危機感を感じていたりしようとも

それらを世界へと発信するツールがなくては問題が議題に上がることはない。

外国語を習得したり他の文化を学んだりすることは自分が思う課題を世界へ伝える、各国の人々にその解決が必要だと納得してもらうための武器なのだ。

檜原さんの熱い思い、そして私たち大学生へのメッセージから

この記事を読んだ皆さんも自身の大学生活への姿勢や目標など考えさせられることが多くあったと思う。

ぜひその感じたことをこの場で終わらせるのではなく、深掘りし今後に生かしてほしい。

筆者の一言

この講演会において、私が最も心に残っているのは「日本人はルールメイキングが苦手」というお話です。

将来、日本の教育の発展に尽力したいと考えている私にとって「自ら制度を形成する力」は、長期にわたって身につけなければならないものだと感じました。

そのためにも、今からできることをコツコツ続けていきたいと思います。

また、今回の講演会では、大学生として学び、成長していくうえで重要な「姿勢」や「生き方」を見つめ直す契機となりました。

「誰のために働き、そして何のために生きるのか」という問いは、

今、まさに私が直面している問いでもあります。

榎原さんが示してくださった数々の問いは、今後、人生の分岐点に立った際に、決断するための物差しになりそうです。

私にとって、大学も折り返し地点に差し掛かりました。

残りの大学生活を実りあるものにするためにも、今回の講演会で榎原さんにお話頂いたことを心に刻み、精進して参ります。



講演の最後に参加者で記念撮影！